

平元正海さん撮影写真展 **昭和30年代 鬼脇の風景とくらし**



平元さんご夫妻と来園された義宮殿下（右） 1963（昭和38）年

【会期】 令和3年8月11日（水）
～ 9月12日（日）

（8：30～17：00）

【会場】 鬼脇公民館2階大会議室
（TEL 83-1321）



ニシンの水揚げ（鬼脇港防波堤）

主催：利尻富士町教育委員会（TEL 82-1370）

このパンフレットは、公益財団法人北海道市町村振興協会（サマージャンボ宝くじの収益金）の助成を受けて作成しています。



平元正海さん撮影写真展「昭和30年代 鬼脇の風景とくらし」の開催にあたって

平元正海さん（1925－2012）は、奥様の富美子さん（1925－2017）とともに、1953（昭和28）年に京都より利尻島へ来住。日蓮宗本山の開教師として、鬼脇村にあった妙泰寺の住職に赴任されました。当時は、ニシン景気も下降気味で、島民の暮らしは決して豊かなものではありませんでした。また、子どもにとっても安心して過ごせる施設はなく、痛ましい事故も後を絶たない状況であったようです。

大学で児童文学を研究されていた正海さん、バレエを習い小中学校教諭の経験もあった富美子さんにとって、こうした現状を放っておくことはできず、太田村長の要請を受けたこともあり、1954（昭和29）年5月5日のこどもの日に、お寺の本堂に開設したのが、私立ルンビニー保育園でした。当初93名の園児でスタートし、保育料は月300円、おやつ代10円とし、そのほかは園で賄うという厳しい運営を強いられ、さらに追討ちをかけるように、昭和30年代に入るとニシン漁の不振により、園児も45名まで落ち込みました。しかし、1959（昭和34）年、独立園舎建設の気運が高まり、町や議会への陳情、バザー・映画会の開催による寄附を募り、翌60年に新園舎が完成。61年には町立に移管となりました。保母であった富美子さんは、周囲からママ先生と呼ばれ、内地からおやつを取り寄せ、お遊戯会の遊戯も舞踊の専門家を呼んで保育所や学校の先生方に講習を行なうなど、田舎であっても「本物」を採り入れた厳しくも愛情あふれる保育を心掛けられ、保育以外でも特に書道の指導に傾注されていました。



一方、園長であった正海さんは、ご趣味の写真撮影を通じて、来島以降、島のくらしを具に撮り続け、膨大な写真資料をのこされました。その内容は、35ミリのモノクロネガのみならず当時としては貴重なカラーライドのほか、中判フィルムも含まれています。膨大な資料は、未だ整理途上にあり、今回の展示には、正海さんご自身が年代や撮影対象を記録された昭和30年代の鬼脇を中心とした写真225点を厳選し、展示に使用しました。

今回の展示を行なうにあたり、資料提供にご協力いただいたご子息の平元周さん、東さん、ご息女の伊部亜理子さんをはじめ、ご協力いただいた方々に記して感謝申し上げます。



しかし、1959（昭和34）年、独立園舎建設の気運が高まり、町や議会への陳情、バザー・映画会の開催による寄附を募り、翌60年に新園舎が完成。61年には町立に移管となりました。保母であった富美子さんは、周囲からママ先生と呼ばれ、内地からおやつを取り寄せ、お遊戯会の遊戯も舞踊の専門家を呼んで保育所や学校の先生方に講習を行なうなど、田舎であっても「本物」を採り入れた厳しくも愛情あふれる保育を心掛けられ、保育以外でも特に書道の指導に傾注されていました。

一方、園長であった正海さんは、ご趣味の写真撮影を通じて、来島以降、島のくらしを具に撮り続け、膨大な写真資料をのこされました。その内容は、35ミリのモノクロネガのみならず当時としては貴重なカラーライドのほか、中判フィルムも含ま

